

て30個分に相当する。完全無農薬なのは言うまでもない。

凄まじい熱量(カロリー)になるが、内燃機関(エンジン)の無い時代には、ごく標準の燃料(兵量)である。大食漢は、仕事のできる男の証であった。

現代は、峻険な山間地から狭小な坂道の漁村まで縦横無尽に走る軽トラは、老若男女様々な住人の生活を支えている。これは日本の誇る適地技術の結晶であり、きめ細かな農作業を可能とし、運搬労働からの解放を果たしてくれた。その時、食べ物は「魂の燃料」へと進化する。

人類史上空前の高度情報化社会は、過酷な肉体労働に代わり、頭脳と神経の酷使を求めて止まない。その時、都会人が渴望するものは、今は忘れ去られた天然の魚の料理であり、清冽な水と清浄な空気である。

石油文明の象徴たる工業製品と化した加工食品は、農薬と保存料の塊と化し、食べるほどに排毒を必要とする。

毒素とストレスに疲弊した肝臓、腎臓を癒すのに薬膳料理、素食の需要は莫大であるが、それに応える素材の生産体制と信頼性は、揺らいでいる。

清浄な野菜や薬用植物を規約に従い生産できる無垢な土地は、激減している。

開拓農民に倣い、事故と病気を回避する生活を設計し、日常の食事を重視すれば、自家菜園を持ち、尊徳翁の生家を模範とする土間と竈の復権が望まれる。

そして農民が農地を労わるのと同様に、自身の腸内微生物群への推譲として、ミネラルバランスの優れた健脳食品を、適時適量を頂く教養人でありたい。

腹の底から生まれる自由奔放な想像力は、混迷の世の中を明るくする。

田園都市から森林都市へ。木漏れ日に映える知性は、小欲知多を旨として、報徳の森を志向し、争いの発生しない生態系産業を勃興する。

## 展望

行政の言葉には、「中山間地」とか「限界集落」とかが、冷酷に存在する。

しかし、南米の日本人農業移民は人の住め無いとされる奥地に、新しい産業を興し、新しい文明への参加という偉業を達成した。

始まりは農業奴隷の代替え労働者という最底辺階級から身を起し、適地技術を磨き上げ、「農民」という教養ある人種が存在を上流社会に認知させた。

自ら移り住んでの技術移転こそ、日本国の海外技術協力の源流を成している。

大規模開発から取り残された地域にこそ、植物本来の生命力は、眠り続け、報徳思想の実践者の来訪を待ち焦がれている。

野生の鳥獣に農作物の一部を推譲し、食物連鎖を通じて土壌微生物の活性化を待つこと、又は炭焼きの煙を山野にたなびかせて、地力のミネラルバランスを整えることなど、身近な楽園・報徳の森の創造を楽しもう。

化学分析機器の進化は、より緻密な観察と実証も、可能にしてくれた。

身近な報徳の森は、生命の源流を蘇らせることであろう。

## 謝辞